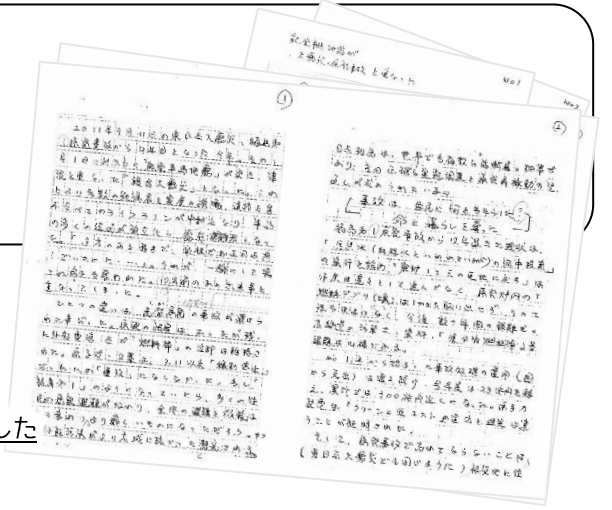


よっ葉だよ

2024 年
3月11日号
No.781

3.11 東日本大震災、福島第一原発事故から 13 年目をむかえ（寄稿）

手書きで寄稿いただきました



2011 年 3 月 11 日の東日本大震災。福島第一原発事故から 13 年目となった今年。その 1 月 1 日に M7.6 の「能登半島地震」が発生、津波と重なった「複合大震災」となった。これにより多数の死傷者と家屋の損壊、道路を含む全てのライフラインが中断となり、半島の多くの住民が孤立化し、震災避難者となった。「夕方のある時まで、家族でお正月を楽しんでいたのに・・・。」それが、一瞬にして壊され命をも奪われた。12 年前のあの出来事と重なってしまった。

ひとつの違いは、志賀原発（志賀町）の事故が避けられた事だった。原発の被害はあったが残った外部電源 1 本で「燃料棒」の冷却は維持された。原子炉 2 基は、3.11 以来「稼働停止」だったため「事故」にならなかった。もし「福島第一」のようになっていたら、多くの住民の原発避難が加わり、全体の避難と救援は質も変わり、より厳しいものになっただろう。かつ放射能汚染がより広域に広がったと想定される。

日本列島は、世界でも有数な”活断層”地帯であり、その正確な実態調査と原発再稼働の見直しが求められている。

「事故は住民に何をもたらした 命と暮らしを奪った」

福島第一原発事故から 12 年過ぎた現状は、「汚染水（処理水といわれているが）の海中投棄」の強行を始め、「廃炉して元の更地に戻す」作業は遅々として進んでなく、原発炉内の燃料デブリ（塊）は 1mg も取り出せず、その工法も決まっていなく、今後数十年間の課題だ。高線量の汚染土、資材、「使用済み燃料棒」等、課題は山積である。

2011 年から始まった事故処理の費用（国から支出）は増え続け、今年度は 23 兆円を超え、累計では 300 兆円近くになった。原子力発電は「クリーンと低コスト」の宣伝と現実とは違うことが証明された。

そして、原発事故で忘れてならないことは、（東日本大震災でも同じように）被災地に住み、暮らしていた「一人ひとり、家族」の命、健康、暮らし、そして生業が、どう変化し、何を失ったか—その実態を見る視点を忘れず、継続して訴え続ける、これが二度と繰り返さない力になると……。これが第一の学びといえる。

事故当時、「双葉郡（2 町 6 村）」には 8 万余の人々が住んでいた。そして事故直後から強制避難が始まった。多くの住民は「3～4 日もすれば戻れるべ」と着の身着のまま手荷物ひとつでバス、車に乗った。しかし、これが数年から 10 年余の避難生活の始まりだった。そして、県内外を転々として避難を続け、本宮市仮設住宅（浪江町の人々）に入居した大倉満さん（現在 73 歳）にお話を聞いた。

避難は、当時 81 歳の母と妻の 3 人で県内を移動、第 7 次避難で本宮・仮設に入った。そしてあいこーぷふくしまと数多くの交流ができた。浪江町の自宅で同居していた息子夫婦・孫達は別避難だった。

その後、仮設住宅が閉鎖され、広野町の復興住宅に移り、浪江町の「自宅」の修理と除染した水田で米づくりを 2 年前から始めた。昨日のお話では、昨年 12 月に一緒に続けた母親が 94 年の命を終えた。事故前は、自宅の畑で野菜を作り販売もしていた。しかし、避難生活で体も心も弱くなった。「事故」さえなかったら 3 世代の大家族でまだ元気だったと話した。

T さん夫妻は、どちらも教員で定年まで勤め、自宅で退職後の生活を楽しみ始めた時に「強制避難」が始まった。奥さんの T・R さんは、教員組合の役員を経験しており、3.11 原発を許さない全県集会やあいこーぷ総代会で「国と東電の責任」を訴えていた。NHK・TV で仮設住宅の T さん夫婦を紹介し、それぞれの訴えをボード板に書いた。ご主人は「喪失感」と、T・R さんは「二度目の棄民」と。奥さんは満州で育ち、敗戦をむかえ日本政府に棄てられ危険の迫るなか帰国できた。その体験の憤りを表現している。

その後、本宮仮設住宅が廃止され、町民がバラバラにされて「復興住宅」に入り、お互いの絆が切れた。そして、主人が「除染の進む浪江町に戻れる！」と語り、T・R さんは「あんな高い線量では帰れない！」と主張がぶつかった。T・R さんは家を出てしまい、その後でご主人が亡くなったが、T・R さんの姿はなかった。

こうした原発避難による「不幸と災い」は多くの人・家族に共通している。それは今も続いている……。

現在、浪江町に「帰町」された人は 2000 名程度で、事故前の 10% にも満たない。戻った人もその多くは高齢化が進んでいる。若い世代は、新しい地で新たな生活と仕事の定着が進みつつある。今後、除染が進み、「学園都市構想」が進展しても以前の街の賑わいは大変困難であろう。

「測って安心 測って対処 過去と現実を科学的に識る」

第二の学びは、2011 年あいこーぷふくしま総代会で「この地に残って暮らすしかない」と決意した。その決意が「この地で暮らせる、暮らせるかな」に変わってきたのは、大きな取り組みがあった。

それは「測って安心、測って対処」の活動と学習、話し合いだった。原発事故直後は何が起きたか、どうなるか、何をしなければならぬか等、はつきりしない状態でした。

放射線、放射能物質は「見えない、臭いもない」「被曝しても痛みもない……」等々であり、これを可視化する測定（数値化）で

あり、その化学的性質を知ることが始まりでした。この「放射能物質」への対処も食べない、外に出ない、遠くへ避難する、だったようでした。事故直後「この福島に住めない。農産物は食べない」の声が根強くありました。

こうした中、地元生産者の「測定器」でハウス作物は汚染していない、野ざらし堆肥には爆発前にブルーシートを被せた、前年度産の米、根菜類も大丈夫、そして水、井戸水、パスちゃん牛乳等の測定値が分かり、毎日多く消費する食材の安心が獲得でき「測る」ことで力になってきた。作付けについても、「表土 5cm までの汚染でそこを削る」有機の土壌は、低い数値、農産物によってセシウムの吸収が異なるなど国内外のデータから多く対策が生まれました。

暮らしの面でも「洗濯物は外に干せる?」「線量の高い部屋はどうしよう?」等、悩み・不安は具体的にあり、測って数値と具体的対応が問われ話し合いを深めてきました。

2011 年 5 月に「私の母乳を赤ちゃんに与えて大丈夫?」の質問。常総生協、母乳ネットワークの仲間の協力で「母乳測定」を実施。結果は、放射性物質が検出された。それへの医師の見解は、「この程度の数値なら、母乳の免疫力を優先させ授乳を継続しましょう。ただし、西日本の野菜セットを手配します」と。そして、その後の再検査では「不検出」でした。

この経験は、大きな発想の転換になりました。「体に入ったセシウムは、排出する」「食物の力、体の持つ免疫力の再認識」等、目からウロコでしたし、放射能汚染下のこの地で生協が果たす役割を学べた。

また、体への被ばく線量も「月間もしくは年間、総量で計り、対処する」科学的対応です。ここから、年間被曝量を少しでも減少させようと子ども避難を検討、更に家族と一緒に子どもも両親も精神的に解放されるの考えから「家族ぐるみ」ツアーを大切にした。他の家族と一緒に、他の生協、生産者の方々と協力もあって楽しみ、学びながら放射能の不安を小さくする活動でした。

食べものの測定の伝え方も「〇〇ベクレル/kg だから、ダメ」という可否の判定でなく、少し高い数値の干柿について「数値は高いですが、おばあさんがお茶請けに 1 日 1 個食べるなら良いでしょう。栄養価も高く、美味いからね。1 日に 1kg も食べないし。でも東京の孫にはもう少し送らないでね。」という会話も出来ました。数値と性質、考え方を知ること、柔軟な対応が生まれた。

「この福島での妊娠・出産が不安・・・」と悩む声もありました。広島に被爆者、被爆 2 世が悩み、考えたことをお教えいただき、伝えることも出来ました。チェルノブイリ原発事故、周辺で暮らす住民の食物、測定数値、測定器などは、暮らしに結びついたもので多くのことが吸収できました。

※写真は、よつ葉生協が 2012 年 7 月に、「有機農業による福島県の農業再建」の試みの現地視察で撮影したものです



こうした国外での原発事故体験から、食べものの測定器と体内に残留している放射性物質を測る「ホールボディカウンター (WB C)」の設置は、「測って安心、測って対処」の延長線だった。こうした「測った数値」は、見解と共に（あいコープふくしまの）機関紙「ひまわり」に掲載し、多くの組合員の指針に役立つことが出来た。また東京電力と賠償交渉の資料として大きな説得力になった。

また「測って安心の数値と対処の方法」は、県内および隣接するあいコープみやぎ、よつ葉生協との情報共有、対処等に活用でき、共に闘っている実感が生まれた。

支援、激励、交流から連帯の絆が生まれた

放射能汚染の深刻さがはっきりすると、様々な「提言」や「うわさ」が流れ、多くの組合員・家族が福島を離れた。「今日は、あの家の灯りがつかず暗いまま・・・」と。孤立感と不安に陥った。福島県内の人の流れも止まった。そんな時期に、生協ネットワークの皆さん、なのはな生協の組合員等が、組合員の不安と疑問を背負いつつも、この福島に来ていただいた。「福島を孤立させない、共に頑張ろう!」と。この場面は、今でも記憶に鮮明に残っている。

こうした激励、支援、交流は、「子どもを守る避難ツアー」「幼な子にふとんの贈呈」「西日本野菜セットの提供」、避難ツアーの「庄内浜交流」「あいコープ生産者交流」等々の激励、支援ツアーが数多くおこなわれた。参加された組合員は、「家族の一員のような歓迎だった」「放射能を忘れた日々だった」と話し、私たち組織の絆にもなった。

こうした体験は、原発事故で強制避難中の仮設住宅の人々への支援、交流、3.11 大震災の被災者、石巻市、高橋徳治商店や丹野商店など、あいコープ生産者への支援、交流に繋がった。

こうした支援・交流は、私たち自身の学びと力に結びついた。どちらも「3.11 の被害者」であり、共に復活にむけて協力して頑張ろうの連帯意識が共有できた。この連帯感は無形の財産といえる。「3.11 東日本大震災を忘れない。福島第一原発事故を許せない」それを現わしている。社会の激動が生協事業に限らず生産者を含め多くの人々の生業と細やかな暮らしを根底から揺さぶった。命も奪われた! こうした、社会の現実と生協事業は密接である。

新型コロナウイルスもそうだった。3.11 原発を乗り越えた「三つの取り組み」を継承、発展させなければならない。「2011 年の桜花は色がなかった」ことを忘れてはならない。この過去を現在、そして未来に発展させる意識を改めて思う。

佐藤孝之（前 生活協同組合あいコープふくしま理事長）

あいコープふくしまの機関紙「ひまわり」



温かいご支援をありがとうございます

「福島県東日本大震災子ども支援基金事業報告書」が届きました



よつ葉生協では、東日本大震災による「被災孤児を支援する募金」を続けています。注文番号910で、一口100円の寄付ができます。震災当時ゼロ歳だった子どもが成人するまでは続けようと継続し、多くの組合員さんが思いを寄せ続けて下さっています。2022 年度末に岩手県、宮城県、福島県へそれぞれ 100 万円を送金しました。この寄付に対して、福島県から 2023 年 9 月に発行された「事業報告書 令和 5 年度版」(内容は令和 4 年度の事業内容)が届きました。内容を一部ご紹介いたします。(詳しい内容はホームページをご覧ください。福島県庁ホームページ [ふくしまこども寄附金](#) [検索](#))

- 寄附の状況 (令和 5 年 3 月 3 1 日現在)
- ・寄附件数 20,765 件 寄附額 7,305,504,976 円 (およそ 73 億円)
- 被災孤児、遺児 (令和 5 年 3 月 3 1 日現在)
- ・孤児：24 人・遺児：180 人
- 給付金給付状況 (令和 5 年 3 月 3 1 日現在)
- ・給付実人員 199 人 ※月額給付金額 (孤児・遺児)：未就学児 3 万・2 万。
小中学生 4 万・3 万。高校生 5 万・4 万。大学生等 6 万・5 万。+入学・卒業時一時金
- 総給付額 749,60,000 円 (およそ 7.5 億円)

「ふくしまこども寄附金」による新たな支援について

平成 24 年 12 月県議会において福島県東日本大震災子ども支援基金条例の改正が議決され、震災孤児・遺児の支援に加えて、支援の対象を県内全域の子どもたちへと拡大し、下記の 5 つの視点から新たな支援を行っています。

【新たな支援の 5 つの視点】

- ①被災・避難等により不便を強いられている子どもへの支援
- ②子どもたちの将来につながる取組
- ③子どもたち及び保護者が元気になる取組
- ④子どもたちのふるさと福島への愛着心を醸成する取組
- ⑤子どもたちの本県復興への参画

※基金を活用した事業の事業費 (H25～R5 年度) 2,167,037,000 円 (およそ 22 億円)

【寄附をくださった皆様へのメッセージ(一部転載)】

いつもご支援をありがとうございます。
私は東日本大震災で父を失い、母との二人暮らしをしていました。生活が厳しかったため、大学への進学は難しいと思っていましたが、「東日本大震災子ども支援基金給付金」をいただけることになり、無事に大学への進学を果たすことができました。
今は他の奨学金と併用しながら、大学生活を送っています。
アルバイトもはじめて 1 人で独立して、立派な大人になれるよう、これからも勉学に励みながら頑張ります。
(大学 1 年生)

いつもご支援していただきましてありがとうございます。
皆様のおかげでとても良い学生生活を続けることができております。本当にいろいろなところからご寄付をいただいていることに大変感謝しております。
感謝の気持ちを忘れずにこれからも頑張っていきます。
(中学 2 年生)

震災から 12 年、この春無事に高校を卒業することができました。当時小学 1 年生でしたが、学校生活を楽しく充実した時間を過ごすことができました。
みなさまの長期間のご支援、本当にありがとうございました。

支援を受けた子どもたちから、感謝の声が届いています。「多くの人に支えられた」との思いが、力強く幸せを掴む励みになれば嬉しいですね。よつ葉生協の組合員の思いが確実に届いています。
(理事 堀)

基金を活用した、新たな支援事業 (一部紹介)

- ジャーナリストスクール開催事業
- 東日本大震災・原子力災害伝承館学習活動支援事業
- アートで広げる子どもの未来プロジェクト
- 輝け未来へ！スマイルスポーツ教室 in ふくしま
- JFA と連携した人材育成事業
- 子どもの夢を応援する「ダイヤの原石発掘トライアウト」
- 元気なふくしまっ子食環境整備事業
- 子ども・若者“地産地消”プロデュース事業
- 専門高校生による小中学生体験学習応援事業
- 工業人材スキルアップ応援事業
- 地域との協働による高等学校教育改革推進事業
- 喜多方高等学校海外研修
- 只見線を活用した学びの場支援事業
- 子育て世代包括支援センター機能充実事業
- 子どもを守ろう！見守りサポーター養成事業、他

ごあいさつ

(前略) この間、国内外の多くの皆様から様々な御支援をいただいていることに対し、心から感謝申し上げます。

震災と原発事故からの復興に取り組む福島県では、帰還困難区域において初となる避難指示解除が実現するなど、福島の復興は新たな段階に向けた大きな一歩を踏み出しました。また、JR 只見線が豪雨災害を乗り越えて 11 年ぶりに全線で運行を開始したほか、県産品の輸出額が過去最高を記録し、県内への移住者数や新規就農者数も過去最多を更新するなど、これまで続けてきた挑戦が目に見える形となって現れております。一方で、未曾有の複合災害からの復興・再生、廃炉と汚染水・処理水対策、風評と風化の問題、急激に進む人口減少、頻発する自然災害からの復旧、さらには原油価格・物価高騰への対応など、本県はいまだ多くの困難な課題を抱えております。

こうした中、被災した子どもたちを長期的、継続的に支援するため、国内外の皆様からお寄せいただいた「東日本大震災ふくしまこども寄附金」を活用し、保護者が死亡したり行方不明になった児童 (遺児・孤児) に対する支援に加えて、本県の子どもたちが、様々な困難を乗り越え、心身ともに健やかに育つための施策に活用させていただいております。(後略)

令和 5 年 9 月 福島県知事 内堀雅雄

よつ葉の広場～話・輪・WA～inつくば 豊里ゆかりの森 にて開催しました！ 12月15日(金)

よつ葉生協が取り扱うお米は、2013年より全てがネオニコチノイド系農薬不使用の貴重なお米ばかりです。そんなお米たちを今回のよつ葉の広場では食べ比べをしました。5種類のお米を食べる機会中は中々ないと思います。よつ葉でも初めての貴重な企画となりました。お米のそれぞれを一つ一つ味わい、特徴をわかりやすく確かめることができました。水分量、かたさ、粘りがあるもの、あっさりしたもの、旨味を強く感じるもの、それぞれの個性を感じました。

お米は日本人にとって欠かせない食材です。献立によってお米を変えてみるのもおかずが引き立ち美味くなる。家族の中でお米の好みが違う場合もあり、ローテーションでお米を変えてみるのも変化と可能性が広がる。そんな発見がありました。

～参加者の声～

- ・初めて食べたNIPPA米がおいしかった。
- ・NIPPA米、クセになります。
- ・食べ比べると違いがわかりました。みんな少しずつ味がちがった。
- ・ササニシキはあまり好きではありませんでしたが、おかずと食べるととても美味しいと気づきました。
- ・いろいろなお米の食べ比べができておいしかった。
- ・さすがよつ葉のお米！
- ・一度に5種類のお米の食べ比べができる貴重な機会でした。
- ・人によっておいしさの好みが違う、家族によっても好みが違うかもと思いました。
- ・みんなで楽しく会話も弾みました。

(理事 針谷光絵)



～食べ比べたお米～

- 大島農園のササニシキ…化学合成農薬、肥料不使用。自然なまの貴重なササニシキ。
- 有機栽培NIPPA米…栃木市産。品種は「つきあかり」。農薬、化学肥料、有機肥料も不使用。自然に負担をかけない、お米本来の味を引き出す自然栽培。
- 有機栽培身土不二…品種はコシヒカリ。栃木県、茨城県産。身体に安全なのはもちろん、自然にも優しいお米です。
- すごい米…山形県産。品種はひとめぼれ。最上川の豊かな水量、寒暖差が大きい土地が育てたお米。
- 黒瀬農舎あきたこまち…秋田県産。もちもちした食感と粘り強さが特徴。

ご意見・ご感想をお寄せください。お名前と組合員番号をご記入の上、共同購入注文書またはお手紙でお願いします。掲載の方には粗品をプレゼントいたします。※掲載するにあたって事前ご連絡をすることはありませんので、ご了承ください。

新型コロナウイルス感染症対策たすけあい募金報告 (2月4週分)

ご協力ありがとうございます。

組合員さんの助けあいの気持ちが広がっています (単位: 円)

栃木コロナ支えあい基金 (860 番)	1, 600
茨城誰かのために募金 (862 番)	1, 000
合 計	2, 600

共同購入注文書の該当番号に数量をご記入ください。

WEB 注文の場合は、左側「企画商品・募金」内の「募金関連」をクリック。一口 100 円の募金になります。

東日本大震災・東電原発事故での支援金 募金報告 (2月4週分)

ご協力ありがとうございます。

組合員さんの温かいお気持ちが今週も寄せられています (単位: 円)

放射能から子どもを守る募金 (900 番)	4, 300
震災孤児を支援する募金 (910 番)	17, 400
「有機農業と国産種子」募金 (920 番)	7, 100
合 計	28, 800

共同購入注文書裏の「10 品以上の記入欄」に該当番号と数量をご記入ください。WEB 注文の場合は、左側「企画商品・募金」内の「募金関連」をクリック。一口 100 円の募金になります。

組合員さんの声

その日に届いた肉、野菜で今日の1品産直おかずで自分も夕食の献立につかわせてもらい大変助けられこれからも楽しみにしています。本当にありがとうございます。(野木地区 A・Sさん)

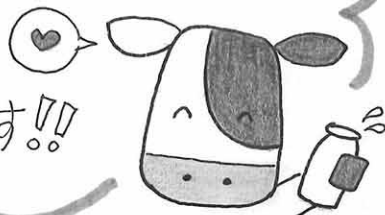
毎週のくらの産直野菜のページで、今日の1品産直おかずを掲載しています。

旬の産直野菜をおいしくたっぷり食べるアイデア、ぜひお役立て下さい!!



今週配布 3月4週 くらの表紙で「酪農家を守ろう」を特集しています。

買い支え、よろしくお願いします!!



●編集・発行よつ葉生活協同組合 小山市栗宮 1223

☎0120-07-1613 TEL 0285-45-9100 FAX 0285-45-9101

HP <https://yotsubacoop.jp/> メールアドレスが変わりました。

よつ葉だよりメールアドレス yotsubadayori@yotsuba-coop.jp



ホームページ



Facebook



Instagram